

幼児教育・保育と小学校教育 の質を高める架け橋の進め方

2025年9月

無藤 隆（白梅学園大学）

架け橋として目指すこと

- 幼児教育と小学校教育との接続を具体化して、どの園・小学校でも実践されるようにしていく。
- 幼児教育の質が充実する中で高めていく。
- 小学校の特に低学年の教育の基礎を幼児教育からの引き継ぎとして作り替える。
- 幼児年長児の1年間と小学校1年生の1年間のすべての単元・主要活動のつながりが見えるようにしていく。
- 幼児教育は現在の面白さを感じて充実するところから将来に向けての多種多様な芽生えが生まれるところである。
- 小学校の低学年教育はその芽生えを教科に応じて拾い出して、その自覚化と拡大を図り、知的社会的な世界へと乗り出すところを助ける場である。
- その具体的な様子を互いに知るにより、それぞれの活動が豊かで多面的なものになっていく。
- そのために年に何度となく、保育者・教師が交流しともに考える場を作っていく。

スタートカリキュラムの進め方

幼と小の接続の始まりは小学校の始まりのスタートカリキュラムにある。そこでは幼児期の学びを生かして小学校での学習活動につなぐ。

1) 出身の園で多くの経験をし、様々なことについて学んできている。ただし、その学びの経験は園により、かなり異なることもある。

①10の姿が発揮しやすい環境・活動を用意し、幼児教育での芽生えの様子を知る。

②小学校に適応するための指導を新1年生の経験や意見を聞きながら、取り入れる意見もあり、そうでないにしても、その理由を説明して進めていく。話し合い活動も可能にしていく。

③各教科等の学習の始まりは10の姿の活動としての遊びから、焦点が明確になった活動へと進め、徐々にそこに移行していく。

④出身園や生まれ月その他の個人差が大きいため、その様子を見定め、活動を調整して、対応を進める。

2) 低学年の教育を生活科を中心に他教科等へと広げるために、合科的・関連的な指導を増やし、体験と言葉を結びつけ、徐々に自覚的な学びへと導く。

架け橋期のカリキュラムを開発するためのいくつかの方略

1) 幼小の子ども同士、保育者と教師の交流と質を高めることから

- 共に互いに保育・授業を参観し、そこでのやり方や考え方、幼稚園教諭・保育士・保育教諭、小学校教諭等の準備や配慮、また子供の学びの様子を互いに参考にして取り入れる。相手に要求することは信頼関係ができてからのことだと考えておく。
- 幼児教育側も小学校教育側もそれぞれの質を高めていくために架け橋プログラムを進めるのだから、その自身の質を高めていく中で、つながりがあることがさらに質を高めると実感することが主眼である。
- 幼児教育では(要領・指針) プロセスとして資質・能力を捉える(興味から意欲を持って関わり、その過程で気づき、目指すものが生まれて工夫していき、粘り強く取り組む)。その捉え方を小学校1年生の時期に拡張していくところで見えてくる。感じ気付き、考え工夫しながら、好奇心を働かせ、意欲をもって取り組み、追究する活動を幼児から小学校1年生へとつないでいく。それが主体的・対話的で深い学びとなっていく。
- 5歳児と小学校1年生で一緒に活動をすることで、それぞれの特徴がどうつながるかが子供にも幼稚園教諭・保育士・保育教諭、小学校教諭等にも見えていく。なお、子どもの交流は必須ではないので、何より保育者・教師の交流と相互理解が肝心である。

2) 特に幼児教育として行うこと

- 幼児期の学びを「芽生え」として捉え、そのいくつかの活動について、いくつもの姿とそこでの芽生えとなる学びが見られることを記述し、それを発展させることが小学校の各教科等の学びの在り方へと発展する。小学校以降の学習が何であれ、幼児期に芽生えとして生まれている。
- 5歳児段階では子供にとって学びの自覚化への活動を少しずつ始める。こういうことを見つけた・できた・分かったという発表や記録作りを通して振り返りと話し合いから、その後の活動の発展に向けていく。保育者が子どもたちが共になって一連の活動をドキュメンテーションとして共に作り、それを特に5歳児の活動での学びの焦点化・自覚化としていく。それは暗黙の学びが外に表現して見えるようにすることである。それを小学校に伝えるようにしていく。
- 幼児期の一つの活動を、10の姿のいくつもの現れとして捉え、そこからさらに伸びていく子どものいろいろな姿を思い浮かべ、それらとの関連でその活動を吟味する。
- 10の姿の一つ一つについて(例えば数量・図形の関心・感覚)、多種多様な多くの活動に現れるはずなので、それぞれの特定の姿の現れを拾い出し、それを整理して、幼児期の学びとして表現する。その「拾い出し」集を小学校に伝えることで、小学校側に理解しやすくなる。

3) 特に小学校1年生として行うこと

- 小学校の単元の内容について、その芽生えが幼児期にいくつもあるはずなのでそれらを探して、芽生えを発展させて単元へと導き入れるにはどうするかを構想する。どの単元についても、その内容などに関連してどんなことを幼児期に活動していたか、そこでどんなことを学んだようであるかを記録などを通して幼児教育側から聞き取って記す。
- まず、小学校の各教科等の何かのやりやすい単元を選び、そこについて幼児期の関連する活動とそこでの関連する10の姿の1つ2つの姿を参照し、各教科等の単元で生かすことから始める。すべての教科で行うことができる。
- 生活科を中心に合科的・関連的な指導を進め、幼児教育での活動と成果を生活科につなぎ、そこからさらに各教科の主な単元へと広げていく。
- 各教科における探究的なあり方を中心として、それを幼児期からの発展として生かす。
- 教科の学習は常に以前に学んだことを元に、それを新たな教材・課題・活動に広げていくことなのであり、1年生においてはそれまでの学習と共に幼児期の学びにその基礎がある。

小学校での各教科等とのつなぎ方の例

各教科等とのつなぎ方の特徴がある。こう考えると、小学校1年生の1学期のみならず、2学期・3学期でもつながりがあることが見えてくる。

- 生活科はどの単元もそこに直結した活動が幼児教育に見つかる。
- 図画工作科は幼児教育でしょっちゅう行っている各種の広い意味での造形活動からの発展となる。
- 音楽科は、幼児ではいろいろな機会に歌うのであるし、また音遊び・音楽遊び・楽器遊びなどを行っているので、それを生かす。
- 体育科は特に運動遊びに注目する。その技術とか達成より、多様な動きをすることの楽しみ方や工夫の仕方、身体のしなやかさに着目する。
- 特別活動では、幼児の（サークルタイム等の）話し合い活動を、クラスとしてまた折りに触れてグループの遊びで行っていることを伸ばしていく。
- 道徳科では幼児期の道徳性の芽生えや規範意識の芽生えを生かせる。
- 国語科では絵本の読み聞かせや言葉遊び、絵本や記録の製作などの活動から発展できる。
- 算数科では様々な活動において数量的経験（数える、数量を比較する、10の単位、大きな数等）がなされており、その発展をどう小学校1年生の筆算の基礎的な算数科の学習活動に生かす。
- 理科・社会科は生活科を通してつながりがあり、幼児では科学への芽生え、家族や近隣への関わりの活動が増えてきているので、それを生かす。

体験の多様さの生かし方

一つの小学校にいくつもの園から子どもがやってくるのが特に都市圏では多い。それをプラスにするには、どう生かせばよいか。

- 資質・能力と10の姿に戻ることによって具体的な内容としては違っていても共通性が見えてくる。
- 一律の内容的な共通性から出発するのではなく、子どもにより内容的に違う経験をしていることをプラスとして生かすよう、子ども同士の交流を工夫する。（それが「個別最適な学び」と「協働的な学び」へと向かうための基本となる。）
- まず探究的に学ぶための資質・能力に着目して、それを引き出す活動から始める。
- 先に知っている子供に説明してもらい、質疑をして、全部の子供を巻き込む。
- 話合い活動から教師がそれを拾い上げ、整理し、説明や発問を加え、単元の学びへと向かう。
- どの子供にも得意な、好きな、こだわりのある活動があるだろう。それを見つけて生かす。

4) 組織として

- 組織作りを進める。各園・各学校に実質的に作業できる担当者を置き、担当者を中心に全校・全園体制を作る。小学校で必ずしも1年生の担任でなくてもよい。また園で年長児の担任でなくてもよいが、必ず全園・全校体制を作る。
- 架け橋期のカリキュラム開発委員会を作る。一律ではなく、各園・各学校の独自性と工夫を大切にしつつ共通性を見出す。地域へと広げるため教育委員会などが主導しつつも、児童福祉等の担当部局などが積極的に加わる。
- 小学校学区などを単位として、そこに全園（公立・私立を問わず）が多少とも関われるようにする。その参加を自治体側が働きかける。
- 幼児教育センター等による援助を進める。架け橋期のコーディネーターなどを派遣する、等。
- その委員会で、架け橋プログラムのガイドブックを作り、また幼保小の合同研修を広げる。
- 互いに保育・授業を見ることを行う機会を増やし広げる。それを基に話し合う機会とする。

5) 保護者・地域との協働から

- 保護者の理解を得る。幼児教育の遊びの中にある学びと、それらが多種多様な芽生えとして出ている（各種の動画が用意されている）。そこから小学校につながることを具体的に伝え、見てもらう。
- 小学校への準備として必要なことを幼児教育側と小学校側が協議して、そこから伝える。
- 小学校としてその低学年で目指すところを保護者に伝え、それがいかにして幼児教育からの発展となるかを明示する。小学校の改革が進んでいて、子どもの学びへの意欲や気づきや思考力の育ちを大事にし、探究的な学習活動を推進していることを伝える。
- 一人一人の学びへの能動的な関わりとそこでの気づきと工夫、そして学校を好きになることが小学校教育全体の基盤となるのだと小学校1年生の授業の在り方から見せていく。
- 幼児教育でも小学校教育でも保護者・地域からの情報・資料・援助が保育・授業で活用できることを伝え、随時、それらを使った活動を行う。
- 地域に出て行き、その「探検」を行う中で、地域の人々の活動の意義を具体的に知る。
- 個別の保護者の期待や不安に対しての応答を随時行い、共に考える。
- 架け橋プログラムに取り組むことで、何より幼児教育と小学校教育が共に、子供たちが園・学校に通うことが好きになり（登校しぶりが減っていき）、その充実した意欲と気づきと工夫に満ちた活動が営まれ、そのことから学力の基盤が形成されているのだということを伝える。好きになることと知的な理解とが相まってその基盤が形成されるのである。